



美里はリビングのテーブルの前に座っていた。その美里の顔の横をガラスコップが通過した。ガラスコップは壁にぶつかると床に落ちた。割れないガラスコップ。それがいいのかわからない。割れないから破片が飛び散る恐れもなく、また、その破片を踏んで、足などが怪我をすることもない。しかし、ひとたび、顔面でもあたれば、ガラスは割れない分、顔面の方が割れてしまう。

「おまえはいつもそうなんだ」

夫の怒声が響き渡る。だが、美里は顔色一つも変えない。変えるもんか。あたしは悪くない。悪いのは夫の方だ。ここで、顔色を変えれば、夫に服従したことになる。夫の過ちを許したことになる。悪い方が強気で、なぜ、正しい方が卑屈にならなければならないのだ。そんな理不尽なことがあるか。

長女と長男の影がリビングのガラス戸越しに見える。二人とも廊下にいるのだ。今日もまた、親たちの喧嘩を見ているのだ。いや、喧嘩ではない。喧嘩ならば、両方ともに原因があるはずだ。だが、美里には非はない。非は全て、夫にあるのだ。子どもたちが二人のやり取りを聞いていることもあり、美里はよけいに冷静になっていく。この姿を知ってもらいたい。非はどちらにあるのかを知ってもらいたい。だからこそ、子どもたちが廊下にいるのを知っていながら、知らないふりをしているのだ。

夫は、次に椅子を蹴った。椅子は美里の方に転がりながらも、テーブルの脚にじゃまされて、反対側に倒れた。今度もだ。夫は逆上しながらも、美里の身体に傷がつかないように、計算して行動している。ここで、美里の体にあざや打ち身ができれば、それこそ、DVとして訴えられるからだ。もちろん、罵声や怒声だけでも十分DVになるのだが、訴えられても罪が軽くなるように振舞っているのだ。暴力を振るうふりをしながらも、決して、実害は与えないようにしている。だけど、自らの力は誇示している。力で美里を屈服させようとしているのだ。なんて、嫌らしい性格なんだ。

「ここは子どものいる場所じゃない。勉強部屋でも行ってろ」

夫は怒りの矛先を美里から廊下に隠れて佇んでいる子どもたちに向けた。夫も子どもたちが聞いていることを知っていたのだ。だから、美里が自分の力に従わないので、美里の弱点、急所の子どもを攻めることで、美里への圧力を増そうとしているのだ。

「ママは大丈夫よ。あなたたちは部屋でいなさい」

美里はガラス越しにぼんやりと見える子どもたちに声を掛けた。そう。あたしは大丈夫。それより、あなたたちの方が危険なのよ、という心を込めて。子どもたちの影が消えた。それを確認してか、夫がしゃべりだす。

「ふん。何がママは大丈夫だ。いつも自分だけが正義の面をしてやがる。正義はいつも大丈夫、勝つとでも思っているのか。被害者は俺の方だ。いつも、いつも、俺だけを悪者にして、この家を、この家族を乗っ取ろうとしている。俺は、お前のそういう態度が気に入らないんだ」

夫は、今度は、ソファのクッションを天井に向かって投げつけた。クッションは天井に当たった後、美里の目の前に偶然にも落ちた。いや、計画的か。

「座れよ。座って話をつけよう」

夫はそのまま床の上にあぐらをかいて座った。夫を見下ろす。小さい。自分よりも十センチほど背が高い夫だが、座れば、美里の腰高ぐらいしかない。それこそ、いつも上から目線で見下されていた。それだけで、夫に歯向かうことはできないと感じていた。だが、今は、違う。夫は自分よりも目線が低い位置にある。それだけでも、威圧感はない。

「座れよ」

下から顎を上げる夫。これまで、恐いと思っていた夫だが、今はそんな気持ちはない。

美里はソファのクッションに座った。クッションの高さ分だけ、夫との目線はほぼ同じになった。その目線の前に夫の張り手が飛んでくる。美里は顔をよけない。目は開けたままだ。ここで、顔をよけると気持ちまでが逃げてしまうからだ。それに、殴られた方が今後、美里には有利に働くはずだ。そんな打診さえも今は考えられる余裕ができた。

「ふん」

夫の手は美里の頬の前で止まった。夫は自分が思うように美里が顔を逃がさないため、不満の顔を表した。美里には、もうこの人の言うことにも、することにも従いたくない、思う通りにしたくないという気持ちが働いていた。

「じゃあ、離婚でもするか」

夫はちょっと公園に散歩にでも行くかのように別れの言葉を切り出した。だけど、離婚するとは言っていない。疑問形だ。答えは美里に委ねている。いつもながら汚いやり方だ。

「・・・」

だから美里は黙ったままだった。離婚するのが嫌だというのではない。それよりも、夫の、相手の出方をもう少し見たかったのだ。

「ちょっとは、残念だ、悲しい、というような顔をしろよ。これまで、8年間是一緒に生活してきたんだろ。おまえには、結婚してから、一緒に生活を共にしようという気持ちがなかったんだよ。俺はすぐに感じたよ。でも、おまえのお腹の中には俺の子どもがいたからなあ。仕方ないから結婚してやったんだよ」

夫の一方的な言いがかりだ。夫は結婚してからも、仕事と称して、夜遊びをやめなかった。相手は美里も知る会社の女性たちや、接待で知り合った夜の商売の女性たちだ。もちろん、結婚する前から、そうした行動があることは知っていた。お腹に子どもの命が芽生えたし、結婚すればそれも変わるだろうと勝手に期待していたのだ。そう、期待だ。一方的な期待だ。だが、夫の生活は変わらなかった。それはそうだ。夫は変える気がないのだから。変わることを期待する他者と変わる気がない本人。結果は見えていた。

「別れましょう」

美里からはっきりと答えを出した。多分、夫はこの言葉を待っていたのだ。その言葉を自分から出せば自分の方が不利になると思っている節があった。だから、これ見よがしに、嫌がらせのような、DVのような、いや、十分にDVの行動を取っていたのだ。

「そうするか」

ほっと、安心したような声。だが、その裏には喜びをひた隠した声だ。何しろ自分が待ち望んでいた結論だからだ。

「じゃあ。役所での手続きは俺がするから」

急に、積極的な猫撫で声。

「さあ。今日は忙しいぞ。早めに家を出るか」

これ見よがしに大きな声を上げると、リビングルームから出ていった。テーブルの上には、朝食の食パンとゆで卵、サラダ、バナナが皿の上に置かれたままだ。何ひとつ手をつけていない。コーヒーだけは飲み干している。これは、今朝だけではない。いつものことだ。どうで食べないのならもったいないと夫の分の朝食を準備しなかったことがあった。その時は

「金を稼いできている主人に朝食を準備しないとどういう訳だ」と怒鳴られた。

どうせ食べないくせにと思いつつも、美里が慌てて準備すると、

「気分が悪い。朝食なんか喰ってられるか」と、テーブルの上のパンなどを一瞥しただけで、予想通りに、一口も食わずに家を出ていった。もちろん、これは、朝食だけでない。夕食も同じだ。食べないとわかっていても、作らないと激怒するのだ。嫌がらせやDVをするチャンスをいつも伺っていたのだ。

それ以来、夫が食べなくても、朝食や夕食を作り続けた。もう、これで、夫に朝食や夕食を作らなくてもいいんだ。ほっとする。反面、これまでの夫との生活はなんだったんだ、という思いが強くなってくる。後悔の一言。だが、失った時間は戻って来ない。嘆いても仕方がない。また、こんな生活なら、戻ってきて欲しくない。それに、あたしには子どもがいる。それも二人も。

「行ってきます」

まるでピクニックにでも行くかのような軽やかな夫の声が聞こえる。これまで美里が聞いたことがない挨拶だ。今までは、ドアが乱暴に閉まる音だけしか聞こえなかった。よほど気分がいいのだろう。それに、その「行ってきます」の行くには、もうここには、この家には、美里たち家族の元には戻って来ないという意味が込められているのだろう。

「行ってらっしゃい」

美里も呟いた。もう、夫に戻ってくるなという気持ちを込めて。これからは、物理的にも精神的にもあの人と離れ、自分と娘と息子の三人で生きていくこと、人生が始まることの宣言だった。

。